

母と暮せば

写真は山田洋次・井上麻矢『小説 母と暮せば』集英社、2015年12月である。全国ロードショー中の同名映画の脚本をもとに小説にしたものだ。「感涙の小説版！」とあるが、目頭があつくなり、読み進むのに苦労したほどだ。

2016年最初のレポートに取りあげた。すぐにでも映画を見たいが、視力がもっと回復してからにする。まずは小説で「感涙」を味わいたい。

小説の「1948年8月9日朝 伸子」の一節から
— またあの日が来た。あれだけの人が亡くなったというのに、浩二は二度と戻らないというのに、翌日からまた陽は昇り、長崎湾に陽は沈み、日々は過ぎていった。生き延びるのがやっとだったことが、むしろ幸いだったのかもしれない。目の前の暮らしに追われてウロウロしているうちに、時間だけが勝手に過ぎていき、6日後に敗戦になった。あと7日早く陛下が終戦の言葉を語って下されば浩二の命は、いや7万人の命は—いや、10日早ければヒロシマ 20万人の命も—繰り返し繰り返し口惜しい思いをなぞりながら過ごした敗戦直後の日々だった。市民の暮らしは大混乱だった。



朝日新聞 12月12日「be」フロントランナーで、山田洋次監督がこの映画について語っている。おとしの夏、東京のホテルで、ひさしさんの三女で「こまつ座」代表の井上麻矢さんから、話を聞いたのが発端です。

ひさしさんは、広島原爆をテーマにした「父と暮せば」、沖縄戦が舞台の「木の上の軍隊」を手がけ、その次に長崎を舞台にした作品を書き、この三部作を作り終えたいとまでおっしゃっていたそうです。麻矢さんは、ひさしさんの遺志を僕にゆだねてくれたのだけど、決まっていたのは「母と暮せば」というタイトルだけでした。

(麻矢さんによると、監督は身を乗り出し、長崎の母ならクリスチャンだろうな、教会があつてステンドグラスがきれいで、と、その場でどンドン構想をお話したそうです) そうでした。息子は長崎医大の学生だな、とすぐ思った。あの大学は爆心地に近くて、900人近い学生、教授、職員たちが死んでいますから。

今年7月、海が見える高台に立つ長崎の黒崎教会で、最後のロケをしました。母と、息子の亡霊が手を取り合つて堂内を歩くシーンで、俳優に交じって出演してもらったエキストラには、その教会の信者の方に出てもらいたいと、当初から考えていました。

(2016年1月1日)